

環境について
みなさんもう一度真剣に考えてみませんか？

Save The Kikuchi River

夕

イワンナギといえは10数年ほど前、菊池川に異常繁殖して困ったことを思い出します。ホテイアオイという水草です。ミズアオイ科の多年草で、南米原産の普通は水に浮いた状態で繁殖しますが、好条件を得ると泥沼でも繁殖します。葉は円形または卵形で光沢があり、厚く鮮緑色をしています。葉柄は長さ4〜10センチ、その途中がふくらんで空気を含み浮き袋の役目をして全体が水面に浮遊しています。根ぎわからつる状の枝を出し、次々と出して繁殖していきます。根ぎわには沢山のヒゲ根を出し葉は東生します。葉柄の膨らんでいるところが、七福神の布袋（ホテイ）さんのお腹のふくらみを思わせることから布袋葵（ホテイアオイ）という和名が付けられたのだと思います。夏季に葉の間から20〜30センチ花茎を出し淡青紫色のきれいな花を咲かせます。観賞用として栽培されることもあり、アメリカの熱帯・亜熱帯地方の植物だから暖地では非常に良く茂り、水田、溝、池などに苗が入ると害草化するの注意しなければなりません。特に栄養化の進んだ水域では繁殖の勢いが激しく、水質汚濁の指標にもなります。10年前頃の江津湖のように湖を覆いボートレースも出来なくなることもありました。その

時は熊本市も困って自衛隊にまで除去作業を頼んだことがあります。菊池川では菰田橋上下2帯の河岸近くの流れの穏やかな所にホテイアオイが張り詰めました。また支流の和仁川の中流付近の福田橋の下流2帯が二面ホテイアオイで覆い尽くされました。小さい川といっても人力ではとても除去できる状態ではありませんでした。建設業の方々がパワショベルで取り除いてくださったことがあります。

ホテイアオイは浮きが付いているので、家庭でベツトとして育てていたメダカや金魚鉢に入れてあった株が何かの拍子に川や溝に落ち込んで、それが根着いて広い川や池に繁殖したものと思われる。

条件の良い所だったら爆発的に繁殖して水面を覆い尽くしてしまします。節の根ぎわからつるを出して伸びた先から、またつるを分かれて伸び出し、葉の柄には浮きを持つていて、一節でもちぎられたらぶかぶか漂って遠くにまで達することが出来ます。流れのあるところであれば流れに乗って適当な居場所に着いたらそこで根とつるを出して繁殖を始めるのです。したがって上流へ向かって移動することはできませんが、下流へはどこまでも流れて行つて淀みに居着いたらそこで大繁殖するといった



ホテイアオイ

具合で、害草化して嫌われるということになるのです。

除去するといつても水中から引っぱり上げた水草の処分に困ったのです。畜産の餌にするとか堆肥にするとかいろいろ工夫されましたが、何しろ水中から引き上げた物だから水気が多くてうまくいかなかったようです。

ホテイアオイは、南米原産で今では帰化植物として全国に広がっています。前述のように熊本県でも異常繁殖した所があり除去するのに膨大な費用を費やした自治体もあります。今のところ少し落ち着いていますが、またいつ異常発生するか分かりません。帰化植物の処分に察しては不意に捨てたりしないように十分注意しなければなりません。

歴史調査の楽しみ方

江栗城跡

3

大田 幸博

(元菊池町史編纂委員会副委員長)

城 跡の山腹は、絶壁箇所も数多くあります。低い山の山城ですが、要害の地に築かれたことになり、選地や縄張り（なわばり）の取り方は、志口永城跡（しぐちなが）に良く似ています。これは、当初からの印象です。

Ⅱ郭は、尾根道が南北に貫いて、区画を東西に二分しています。最上位のⅡ郭①は、標高57・3m、長さ16m、幅9m。Ⅱ郭②は、Ⅱ郭①と1〜1・9mの高低差があり、長さ20m、幅は、中央部で6・5m〜12m。この2区画が、Ⅱ郭の中心域と思われます。

西下のⅡ郭③は、長さ28m、最大幅7m、斜面部の造成地で、Ⅱ郭②との高低差は、3・4mに増大します。

尾根道は、幅2〜4m、西上のⅡ郭①とは、0・7mの高低差があります。道から東下には、2段の带状地形が、1・1〜1・6mの高低差で並列しています。

Ⅱ郭の中心域は、南北50m、東西46mと推定され、地形的なまとまりが感じられます。

A区は、Ⅱ郭とⅠ郭を結ぶ派生尾根で、地形の鞍部にあたります。Ⅱ郭③とは、3mの高低差があります。带状の痩せ馬地形で、長さ25m、幅4・5〜11m、少し窪んでいますが、堀切の埋没はないようです。南北両縁の斜面部は、絶壁です。

A①・②は、A区の延長部分です。A区よりも少し

高く、接点個所で、+0・3〜+0・5mの段差があります。A①は、Ⅱ郭②・③の南西下を走行しています。長さ33m、最大幅7・5m、Ⅱ郭②とは、5mの高低差になります。A②は、Ⅰ郭の東端下を走行しており、長さ19m、最大幅6・5m、西端で、段上のⅠ郭①に接しています。高低差は、1・4mです。

Ⅰ郭①は、Ⅰ郭の東下を走行しており、長さ39m、最大幅5m、Ⅰ郭との高低差が5・4mになります。

A区と、その周辺は、Ⅱ郭とⅠ郭間の重要な区画です。そのために、大規模な造成工事がなされています。

Ⅰ郭は、上位部分が調査の途中です。標高は、南端で58・1m、地面域は、これより北側に緩傾斜しています。この状態は、志口永城跡の山頂と同じです。

Ⅰ郭の南東斜面にはⅠ郭②・③の段状地形があり、最大幅4m、釣り針のような形をしています。高低差は、1・3m〜3・7mほどです。

Ⅰ郭③の端部から、派生尾根は、痩せ馬地形となり、南西方向に延びて、Ⅰ郭④・⑤を形成します。上領域は、いずれも平らで、東西両端は絶壁です。

Ⅰ郭④は、Ⅰ郭③との高低差が4・5m、幅7〜1・5m、長さ40m、端部で括れます。外観的には、通路そのもので

す。

Ⅰ郭⑤は、段上がりになります。Ⅰ郭④との高低差は、0・8m、この区画も、Ⅰ郭④と同じ带状の地形をしています。端部からは、県道と仁・菊水線を望めます。

